本部だより

●第15号

マーシャル方面遺族会

●環礁・本部だより第15号●発行日：平成19年2月1日●発行人：黒川誠
●マーシャル方面遺族会本部：〒142-0051 東京都品川区平塚3-4-17
●電話03-3783-8382●FAX03-3783-8384●振替番号00100-0-93487

クェゼリン島主碑での慰霊祭（平成18年11月8日）

明けまして
おめでとうございます。

春風
献上

平成十九年元旦

本部役員及び篤志会員

相談役	大給湛子	幹事	佐竹エス
会長	黒川　誠	同	草場　寛
常任幹事	荒木常子	同	畫間志津子
同	高橋鎮夫	篤志会員	
幹事	高林芳夫	徳原徳子	
同	山口良二	山村　要	

平成十九年度

慰霊祭・総会・直会のご案内

会長　黒川　誠

会員、会友の皆様には、お健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。本年の慰霊祭・総会・直会を次の通り行います。皆様お誘い合わせてご参加下さいますよう、お待ちしております。

◆慰霊祭

日　時　平成十九年四月七日（土）
午前九時（当日は日曜日ではありません。くれぐれもお間違いなくご予定下さい）

受　付　靖国神社参集殿前　本封筒をご持参の上、出席名簿とご照合下さい。専用のワッペンをお貼りになった方のみが昇殿参拝出来ます。

慰霊祭　午前十時（ご本殿）

◆定期総会

慰霊祭後、靖国神社境内、**靖国会館**前にて記念撮影後、**同館二階**（田安・玉垣の間）で行います。

◆直会（なおらい）

総会終了後、その場所が直会会場となります。閉会は三時の予定。

●お願い

◇同封の出欠はがきは、欠席の方も各項目にご記入の上、二月末日まで本部に到着するようにご投函下さい。

◇本会への賛助金、直会費（一名四千五百円）、玉串料（一名五百円）は、同封の郵便振替用紙にて二月末日までにお送り下さい。

◇当日は混雑が予定されます。受付では現金の取り扱いは致しません。

●九段会館に宿泊希望の方へ

◇予約は本部にて済ませていますが、三月二十日までに各自で直接お申し込み下さい。なお、宿泊費は八千百九十円（一泊朝食のみ）となります。

◇九段会館（電話03・3261・5521宿泊担当・村上克己支配人）

平成十八年度　マーシャル方面遺族会　永代神楽祭（命日祭）奉奏

永代神楽祭出席者（靖国神社参集殿応接室）

冨田ミツ（福島）

出席者（上の写真右より、冨田キミ、佐藤知子、冨田ミツ、佐竹エス、晝間志津子、黒川直吉、荒木常子、黒川誠、櫛崎馨、小田原利子、森田譲二の皆さん）。十八年度マーシャル方面遺族会永代神楽命日祭に出席致しました。この「みたま祭り」は、二百四十六万余柱のみたまを慰めるため毎年行われており、今年で六十回目となります。

靖国神社境内には三万近い献灯やボンボリが飾られ、夜空を彩り、東京の夏祭りとして親しまれ、参道の両側は出店で賑わい歩くことの出来ない程でした。また観光バス停も満杯の状態でした。

本会の命日祭は第二日目の七月十五日午後二時より行われ、総勢十一名が出席致しました。会員の方々も老齢となり、出席者も少なくなりました。私も十二年続けて来ましたが、今後は出席出来るかどうか不安に思っています。何卒お若い方々のご参加をお願い致したく存じます。

当日は昇殿前にものすごい雷雨の洗礼を受けました。おかげでご本殿周辺は雨に打たれた緑も冴えて、清々しい気持ちで昇殿参拝が出来ました。ご祭神も喜んでいただけたものと拝受致しました。

最後に、御霊鎮まる靖国を政争の場とする事は絶対止めて欲しいと思います。

平成十八年度 靖国神社秋季例大祭に参列して

黒川　誠

今秋の例大祭当日祭（十月十八日）は、好天に恵まれて、祭式は滞りなく進められました。受付の参集殿前は混雑していましたが、参集殿内は静かで、神官の案内で指定の席へ次々と案内されました。拝殿は満席となっており、本殿前の仮設席へと誘導されて着席致しました。

快晴の秋空はあくまでも高く、心地よい秋風が境内を流れ、温度湿度ともに快適の故か、参加者は仮設席も不足する程の盛況でした。祭式は午前十時定刻に始まり、国歌斉唱後南部宮司により内陣の御扉が開けられ、祝詞が奏せられました。

勅使御幣物奉奠に続いて本殿中庭にて國學院大學吹奏楽部、コーラス部による鎮魂歌、靖国神社の歌を合唱して、当日祭は滞りなく齋行されました。

特別参列者、崇敬者総代、参列者が続いて本殿に進んで拝礼の長い列が出来ました。戦後六十年以上も過ぎた今日、私を含めて高齢者ばかりが目立ちます。この人達はあと何回位例大祭に参加出来るだろうかとふと考えが頭の中をよぎりながら帰途に着きました。

「靖国神社秋季例大祭当日祭祭式次第」より。

鎮魂頌

作詞　折口信夫
作曲　信時潔

思ひみる人の　はるけさ
　海の波　高くあがりて
　　たたなはる山も　そそれり
かそけくもなりにしかなや
海山のはたてに　浄く
　天つ虹　橋立ちわたる
現し世の歎の苦しみ
　たたかひにますものあらめや
　　あはれ其も　夢と過ぎつつ
　　かそけくも　なりにしかなや
今し　君　安らぎたまふ
　とこしへの　ゆたのいこひに
あはれ　そこよしや
あはれ　はれ　さやけさや
　神生れたまへり
この國を　やすくなすと
　あはれ　そこよしや
　神ここに生れたまへり

奉頌歌

靖國神社の歌

献納　主婦の友社
作詞　細野國造
作曲　陸海軍軍楽隊

日の本の　光に映えて
　盡忠の　雄魂祀る
宮柱　太く燦たり
あゝ大君の　御拜し給ふ
榮光の宮　靖國神社

日の御旗　斷乎と守り
その命　國に捧げし
　まうすをの　御魂鎮まる
あゝ國民の　拜み稱ふ
いさをしの宮　靖國神社

報國の　血潮に燃えて
　散りませし　大和をみなの
清らけき御魂安らふ
あゝ同胞の　感謝は滅る
　櫻さく宮　靖國神社

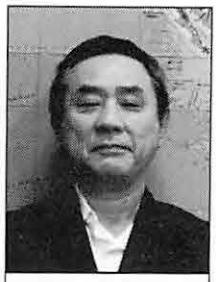
幸御魂　幸はへまして
千木高く　輝くところ
皇國は　永遠に榮たり
あゝ一億の　衆み新る
　國護る宮　靖國神社

平成十八年度

マーシャル・ギルバート諸島戦没者現地慰霊巡拝

慰霊巡拝の報告

主催　マーシャル方面遺族会
日程　平成十八年十一月五日から十日
場所　クェゼリン島・ルオット島



高林 芳夫
（担当幹事）

参加者は次の十九名の皆さんでした。荒木常子、井上賀雄、井上庸子、岩瀬三樹三郎、岩瀬義江、岩瀬純子、植田和明、植田敏裕、奥井禮子、奥井國夫、岡野智津子、腰川妙子、佐竹エス、佐藤知子、末広澄子、瀬戸隆子、高林芳夫、畫間志津子、油井芳枝。

日程

十一月五日（日）東京駅十二時集合バスにて靖国神社参拝後成田空港へ。結団式。成田発十七時十五分グァムへ。グァム着二一時五十分。グァム泊

十一月六日（月）グァム発八時一〇分クェゼリンへ。クェゼリン着一七時三六分。クェゼリン泊。

十一月七日（火）九時三〇分発ルオット島へ。ルオット島にて慰霊祭。午後二時発クェゼリンへ。自由行動。クェゼリン泊。

十一月八日（水）九時より慰霊祭。午後島内見学・海水浴。夜、現地の人達との交流会。クェゼリン泊。

十一月九日（木）クェゼリン発一二時二〇分グァムへ。グァム泊。

十一月十日（金）グァム発十三時成田へ。成田着十五時四十五分着。通関後解散。

現地慰霊の感想　今回の慰霊の旅は、過去の現地慰霊には無かった大きな出来事が二つあります。

その一、それはリード司令官が慰霊祭に最後までお付き合い下さった事。一緒にお参りもいただきました。日本人もアメリカ人も戦死者を追悼する気持ちは変わりません。皆様と一緒にお参りができて光栄です。とのご挨拶をいただきました。

その二、それはクェゼリン島で交流会を行った事。リード司令官はじめマーシャル政府の関係者・クェゼリン島の地主の方・クェゼリン病院の院長先生・慰霊碑の維持管理をして下さっている考古学者のレズリーさん、マジュロ、イバイ、ルオット各島からマーシャルの日系人の方々が参加下さいました。

私達は日本人として「浴衣」で参加しましたが、思わぬ大歓迎を受けました。大盛況の盛り上がりに時間をオーバーしてお開きとなりました。私達の帰国後に現地よりメールが届きました。それによると、翌日には島中の話題となり次回は

主碑祭壇。供物は慰霊祭後に撤収。

是非マーシャル人婦人会が主催でパーティーをやらせて下さいとの申し入れがあったそうです。マーシャルの料理や歌や踊りも用意したいとの事です。

今後の現地慰霊はマーシャルの人達との交流も楽しみです。

今回の現地慰霊に際し黒川会長、グレッグ・ドボルザークさんや大勢の皆様の御尽力をいただきました、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

荒木 常子
（東京）

心残り　昭和五十年第一回の慰霊団に参加して夢の様な感激を味わい、その後も二、三回の慰霊で父の戦死の島ブラウンにも二回程行く事が出来ました。

しかしブラウンもエニウエタックまでで本当に父の没したメリレンにはどうしても行かれず、それが一つの心残りとなっています。

もう年齢的には無理と自分なりに諦めておりましたが、偶然ふとしたきっかけから同年の岡野さん、畫間さんと一緒に参加しようという事になり、急転直下再びパスポートの申請となりました。

昔訪れた頃のクェゼリンは、未だ米軍の基地で宿泊すること等出来ず、飛行機の給油の時間を急ぎ慰霊に当てて、三、四十分足らずで飛び立つというあわただしいものでしたが、近年は此の島のロッジに宿泊出来るようになって初めての訪問でした。

降り立ってみると、昔の記憶で考えていたより遥かに島は大きく、すっかり整備されて美しい楽園の様に変貌しておりました。

美しい空、海をバックにそそり立つ椰子の木々。その間を水平線より昇る朝日、そして沈む夕日を望められた事は、宿泊出来てこそ味わえる感激でした。

予定が変更になって八日に行われた慰霊祭にはリード司令官が参列下さり、碑の前にドボルザークさんと二人膝を折られて日本流に焼香をして下さった事には感激しました。

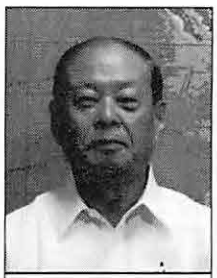
父は戦前より毎年海軍の仕事でマーシャルに来ていましたので、当クェゼリンも訪れたと思いますし、途中降り立ったチューク（昔トラック）、ポンペイ（昔ポナペ）にも長い滞在をした話を子供の頃より耳にしていました。

また、叔父の佃敏郎（母の弟）もクェゼリンで戦死しておりますので、この島で三日間を過ごせました事は大いなる喜びでした。

祭壇にぬかずくリード司令官。隣はグレッグ・ドボルザーク氏。

最後の日には司令官はじめ、マーシャルのお偉い方々や島民の方々との交流会が開かれ、高林さんの発案で全員ゆかたで参加する事となり、これが先方の皆さんに思いのほか好評。また私達も思いがけず日本の夏を想い起こされ、とても楽しい海辺のひとときを過ごす事が出来、良い想い出となりました。

此の間、わざわざ来島されてお力添え下さった、ドボルザークさんに心より御礼申し上げたいと思います。


井上 賀雄
（東京）

立派な慰霊祭　昨年に続き現地慰霊に参加することは、今年は無理と思っていた私どもに、八月に入って今年の慰霊訪問に際しては、我々遺族に会いたいと申し出ている年配の現地住民がいるとの情報がありました。

同時に、昨年の現地慰霊でもいろいろとお世話になったアメリカ人グレッグ・ドボルザークさんが、今年も留学中のオーストラリアからクェゼリンに来て、通訳や、コミュニケーションなど、なにかと面倒を見てくれる予定です。

これは是非とも現地に行って、戦争当時の話などを聞くことができればとの思いから、急遽、関係者に渡航の手続きをしていただきました。

慰霊祭行事については、別途報告があると思いますのでここでは割愛させていただきますが、高林さんはじめ多くの皆様の大変なご尽力と、団員の一致協力のお陰で、厳粛の中にも清々と、一人ひとりの想いをこめた立派な慰霊祭ができたと思います。

一、ルオット島の慰霊祭で、「JAPANESE 日本人墓地 CEMETERY」と書かれた鳥居の上方を見れば、青空に白い鳥（ケアル）が二羽、三羽と揃って飛び回りながら昨年同様我々を歓迎してくれました。

翌日、クェゼリン島での慰霊祭には、新任のアメリカ軍リード司令官が、公務多忙にもかかわらず正装の軍服で参列され、挨拶の中で、

「・・・本日の皆様の悲しみを共感し、共に慰霊させていただきます。我々も、第二次世界大戦でたくさん命を失いましたが、この慰霊祭を通じて私たちが繋がっています。全ての戦没者は我々の家族でもあるのです・・・」

と話されました。

さらに、マーシャル方面遺族会が三十八年前に造った慰霊碑にリード司令官は膝まづき、日本式に御焼香をして手を合わせ、祈りを捧げられました。この

光景は、私たちにとって初めてのことであり、誠に有り難く深い感動を禁じ得ませんでした。

二、アメリカ軍と共に現地に駐留している人類学者レスリーさんの研究室に、グレッグさんが我々を案内してくれました。そこで予め持参した「父、兄の写真」を研究の資料としてコピーしてもらい、玉砕により遺品など一切無い遺族にとって、少しでも当時の様子が分かる手がかりにでもなればとの思いをこめて、（戦闘の後、六十三年も経過していますが）調査をお願いすることになりました。

三、クェゼリン島での諸行事の後、夕方から同島エモンビーチの浜辺で「感謝親睦交流パーティ」を我々遺族会主催で行うことになりました（グレッグさんが前もって米軍、島民と連絡をしていたお陰です）。

勿論、現地の協力があってのことですが、料理は米軍食堂からのケータリング、バイキング方式とすることになりました。

出席者は米軍リード司令官および関係者、マーシャル諸島共和国政府関係のノダ氏とその家族、クェゼリン島酋長および関係者、そして島民とその家族などなど、それに我々と合計四十～五十名。

日本の遺族の多くは、高林幹事の発案で持参した浴衣姿で参加しました。これは大好評！　常夏とは言え、南洋の島では珍しいスタイルですが、皆様から大歓迎を受け、パーティも華やいだ雰囲気になりました。

（英霊たちは日、米、マーシャルの親睦交流会が開催されることを、想像したでしょうか？）

挨拶に立ったリード司令官は、

「・・・戦後平和になったこの島は、現在でも米軍の重要軍事施設があり、今まで公式の場で、米軍と島民との間にこの様な交流会はありませんでした。今回、日本の遺族の皆様が島民や、我々を招いて親睦交流会を催された事は極めて有り難い事で、これを機会に今後とも同じファミリーとしてこの様な交流は続けて行きたいと思います・・・」

と述べられました。

また、この交流会のために牛肉を日本人好みの味に煮て差し入れてくれた日系三世のマツナガさんは、日本の歌を昔のものから最近のもの（知床旅情など）まで楽しそうに歌われました。奥様の話によれば、「彼は日本人の皆様を前に、久し振りに日本の歌を日本語で歌って幸福感に浸っているようです」と仰っていました。お互いの自己紹介や、我々遺族が覚えたての現地の歌『あの椰子の島』を現地の人と一緒に歌ったり、楽しいひとときを過ごしました。

途中、何処からともなくトランペットの美しいメロディが全島に響き渡り、リード司令官はさっと立上がって慎み深く言われました。「これは、毎日、夜九時の消灯ラッパにつづき鎮魂の意味をこめ、安らかにお眠りくださいというものです」と。パーティ参加者全員もそれに倣ってラッパが鳴り終わるまで立ち尽くしました。

その後、島民による流れるような美しいハーモニーの合唱など、時が経つのも忘れ、気がついた時は、夜十時を過ぎていました。〝See you again!〟惜別の思いでそれぞれ家路につきました。

今回の現地慰霊訪問は、米軍、島民のご理解のもと、その目的が達成され、お

互いの親睦をより深めることができ、遺族としての絆も固いものになった様に思います。

マーシャル方面遺族会はじめ多くの皆様に、心より感謝いたします。

岩瀬 義江
（神奈川）

慰霊の重さ　父、岩瀬三樹三郎の兄、富士松は、二十四歳のときクェゼリン島で戦死しました。満州にいるものと、家族には知らされていたのですが、届いた手紙には「南十字星の見える島から」と書かれていました。そして、その便りが最後となりました。

父は以前から慰霊に参加したいと願っていましたが、地理的に遠いこともあり、なかなか決心が付かなかったようです。八十歳になり体力も衰え、体の変調もあって、これがおそらく最後の機会であろうと、参加を決意したようでした。

付き添いには母、順子と私、義江が同行しました。戦後生まれで、高度成長の中に育った私には慰霊の言葉の重さがよく解りませんでした。

十一月五日東京駅に集合し、靖国神社に参拝して、クェゼリン島に向け出発しました。グアム、チューク、ポンペイ、コスラエを経由して、やっとクェゼリン島に到着しました。米軍基地である島は、絵葉書のようなのんびりとした、美しい南国の島でした。

七日、八日ルオット島とクェゼリン島で慰霊祭を行いました。驚いたことに両慰霊碑は米軍によってとても綺麗に管理されていました。クェゼリン島では、リード司令官も参加され厳かに行われました。お花やお供物をお供えし、全員でご焼香、お祈りを奉げました。最後に、司令官より贈られたプルメリアの木を植樹して終わりました。父も心の痞えがとれた様で、とても満足そうでした。

その後島内の戦争跡地をバスで見て回りました。司令棟、トーチカ、大砲など当時のままの状態でした。環境考古学者のレスリー先生や通訳をして下さったグレッグ氏から当時の戦争の様子を伺い、参加者全員複雑な思いで聴いていました。沢山の椰子の木やプルメリアの木、周り一面の芝生と、とても美しく管理された島の中で異空間のオブジェのような戦跡でした。

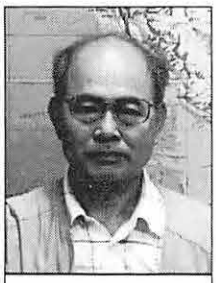
最後に湾内の珊瑚礁の海で休憩をしました。真っ白な砂浜、コバルトブルーの海、マーシャル諸島の「真珠の首飾り」といわれる、この美しい島々で、六十年前に全員玉砕という現実があったとはとても思えませんでした。

最後の夜、アト・ラングキオ酋長はじめ日系の方々や現地の方々との交流会が、行われました。私は父の具合が悪く最後まで出席出来ませんでしたが、大成功に終わったようです。

今回の旅で感じたことは、唯一つ家族の思いでした。戦争で残された家族は、何年たっても癒されることはないと思いました。「慰霊」、私にとって、とても不思議な旅でした。

父の体調を心配しながらの旅行でしたが、やや認知症ぎみの父を、全員で見て頂き、大変助かりました。皆様と御一緒できたことを、心より感謝しております。有難うございました。

父は今、写真を見て、この慰霊の旅を思い出して過ごしています。



奥井 國夫
（広島）

ジミーさん日本を歌う　マーシャルでの交流会は、ときの経つのも忘れ三時間あまり盛大に行われた。

交流会風景。

赤ちゃんから長老の方まで、多くの皆さんが家族ともども参加してくださり、旧知の人が訪れたように、我々を歓迎してくださった。

クェゼリン在住四十年（山口県出身）ジミー・マツナガさんは、祖国への思いが一気に湧き上がったのでしょうか、次から次へと唱歌・童謡など多くの歌を一緒にうたいました。

小さく折りたたんだ紙切れを財布から取り出し、おもむろに広げると、そこには〝知床旅情〟の歌詞が体に似合わず小さな字で書いてあった。

一番を歌い終わると裏には二番があった。私はメロディと一番は何とか知っているが、二番となるとあやふやで、明かりも暗く字も小さく、おまけに目も悪く読み取れない、これにはまいった。

マーシャルの皆さん、参加していただいた皆さん、このたびはありがとうございました。

交流会を計画してくださった皆さん、ありがとうございました。

またお会いできる日を楽しみにしています。

帰路の飛行機は、クェゼリンで給油に時間がかかったり、グアムでは搭乗した飛行機のエンジン不調で出発できず、整備をしたりと想定外の事もありましたが、無事に帰国でき皆さんお疲れさんでした。

奥井 禮子
（広島）

涙なみだ　クェゼリン、ルオットへの慰霊の旅に、八十八歳で参加させていただきましたが、元気で済ますことが出来ました。

これも、泣いたり笑ったりしながら、ご一緒してくださった、皆さまのおかげと感謝しています。

慰霊祭で歌った「ふるさと」

こころざしを　はたして　いつの日
にか　かえらん

涙なみだで声になりませんでした。

リード司令官はじめ多くのマーシャルの方々のご親切に接し、クェゼリンに眠

る兄も、喜んでいることと涙しています。
これからも、現地での慰霊をいつまでも続けてくださるよう、心から念じています。

岡野智津子
（神奈川）

感慨無量　紺碧に輝く環礁の島クェゼリンが近づき、思わず「義兄さん、ヤットあなたの許へ参りました」と心の中で呟いておりました。

この度の墓参は、義兄の墓前に亡き夫の三回忌を無事終えた報告を兼ねての旅となりました。現地に降り立ち、椰子の木が風にそよぎ、静かな趣のある風景に暑さも忘れ、夫がよく聞かせてくれた此の島に今自分が立ち、墓参の叶うことに感慨無量の想いでした。

毎年訪れておられる方々の「第二の故郷だ。懐かしい」などの声を聞きながら、三日間お世話になる「クワジェロッジ」へ向かいました。

十一月八日、朝食後ロッジロビーに集合して、バスにてクェゼリン戦没者慰霊祭場へ出発。

昨日のルオット島と同じく、墓地の前に白い天幕が張られ、整然と椅子が並び、早朝より用意して下さった温かい心に感謝致しました。

墓碑の清掃から始まり、思い思いに持参したお供物を墓前に供え、準備万端整った頃、正装のリード司令官が車で見えました。昨年もお世話になったグレッグ・ドボルザークさんの通訳で井上団長や高林さん達と挨拶を交わされ、墓碑正面に着席いただく。

高林さんの司会で慰霊祭が始まりました。黙祷。井上団長の「追悼の辞」、荒木さんの「般若心経」に合わせて全員が読経。

続いて墓前に順々に進み、お線香を供えて「海ゆかば」、「里の秋」、「ふるさと」の合唱がはじまる頃は、涙で声が詰り、皆さんの啜り泣きに誘われ、とめどなく涙が流れました。

この美しい南海の孤島で激戦の最中義兄は散り行く自分を感じながら、父母や弟を想い、どんなに切なく辛かっただろうと義兄の心境を察し、また涙が流れて暫く言葉も出ない中、白い二羽の小鳥（ケアル）が空高く碑の周りを旋回し、去って行きました。ケアルは島では幸運の鳥であると聞き、墓参に訪れた私達を御霊に替わり喜んで迎えているかのように思え、心が和みました。

リード司令官は最後まで共に列席下さって、墓地に記念樹を賜り、お土産まで頂戴し、英霊に対する情け深いお心に感激致しました。

クェゼリン島の三日間、島内見学、資料館見学をし、当時の状況が良く解りました。海水浴場での楽しい一時、最終日の夜の浴衣での合同パーティと、様々沢山の思い出を戴き、実に泣き笑いの充実した毎日でした。

機内よりコバルトブルーの海を眺め、美しい島に眠る御霊に心安らかにと手を合わせ、別れを告げました。合掌。

最後に参加者全員の皆様、また男性の方々にはいろいろとお力添えを戴き、ありがとうございました。おかげさまで何の支障もなく無事帰国出来ました。御礼申し上げます。

佐藤 知子
（埼玉）

鳥になりたい　私にとって前回同様に充実した旅となった。戦争の空しさを知り現地慰霊を重ねることでやっと得た「ゆるす」ということをあのパーティーが証明したのではないだろうか。

美しい海と木々を背に揃って記念撮影。

子供の澄んだ瞳、何ものをも包み込んでしまう様なやさしいハーモニー。父も現地の人達と交流を持ったことであろうと想像される。

父の戦没地はブラウン。少しでも近くに身を寄せたいと願っていた海で泳ぐことも出来た。背泳ぎをし父からの手紙「敵機は見えず穏やかなもの」と写真、双眼鏡を持ったもの、大きい魚を持った姿等を思い浮かべ波に漂えた。

ふり返って、リード司令官の行動、言葉にも感動を覚えた。ケアル（鳥の名前）が飛ぶ姿にどんなに家族の許に帰りたかったことか。ついに祖国の土を踏むことは叶わなかった父。悲しみを知る者ほどやさしくなるという。我欲に捕らわれず素の姿を大切に慰霊を重ねたい。田村、グレッグ、高林諸氏の連携プレーと奥井ファミリーはじめ、協調性を持つ仲間が居ての楽しい慰霊だった。

それにつけても、会のあり様に問題があることは悲しいが、自分が慰霊出来なくなったからといって、これで終りということではなく、祖国のために礎となった英霊と血縁が薄くなっても、日本人がお参りしてゆけるよう考えたいものである。それでこそ浮田、佐竹両氏はじめマーシャル遺族会が碑を建立した意味を持つのではないだろうか。碑はすでに物語を残しつつあると思うのであるが。

瀬戸 隆子
（広島）

父が見たお星様　平成四年に初めて政府主催の慰霊団に参加して、マーシャルへは今回二度目です。前回御一緒した佐竹さん、荒木さん、懐かしく心強い同行者でした。

前回マジュロの夜の浜辺で涙でかすんだ父も見たであろうお星様を眺め乍、また訪れますからと父に約束してからアッと云う間に十年余りの時が流れました。

目の中に入れても良いと云っていた可愛い娘も頭は白く足腰の痛い七十五歳の老女になりました。

今回の旅は父の顔も知らない妹と参りました。

事故もなく父との約束の果たせたこの

旅に誘ってくれた、妹に感謝しています。ルオット島、クェゼリン島どちらも慰霊碑変わりなく綺麗に管理されていて、心安らぐ思いと共に慰霊祭での種々の心遣いのお陰で心のこもった追悼の出来ました事、米軍関係者の方々、また色々とお世話頂いたドボルザークさんに御礼申し上げます。

この度の訪問で現地日系人の人達との「ゆかた」での交流会。言葉は通じなくても人間同士心は通い合うすばらしさを実感し、得難い時を過ごさせて頂きました。散華された方々も、笑顔で見守って下さったと思います。

旅を終えた今、あの美しい南の青空を二度と原爆雲で汚さないで下さいと願い祈っています。

最後になりましたが、団長の井上さん、高林さん、奥井さん、田村さん、考古学の先生、同行の皆様、有難うございました。忘れられない思い出の一頁の旅の無事に終わった事に感謝申し上げます。

十一の吾いだきしめ征きし父
思へば泣けり玉砕の地に

畫間志津子（東京）

始めて手にしたパスポート
ちょっと翳して 胸を張る

その身にあらねど　昨年夏他界した主人がし残した現地慰霊を私が代わって果たそうと、遺影を胸にしての旅立ちでした。

あまり好みとしない機上の人となった私は、何時しか戦死した義兄と主人の間にあった一個のリンゴの話を思い出していました。

食糧難時代のリンゴ。

「あの時兄貴にあげれば良かった。戦死して仕舞うなんて・・・と悔いる。お互いに譲り合ったであろうに・・・」。

思い出話を多々聞かされました。

一面識もない私ですが、しゅんとなっていました。

やがて様相の一変した地に降り立った私は、「えっ、慰霊、お墓参りにきたのよね」と島々の美しさに驚きました。

戦後六十年の余も過ぎればもっともな話、認識不足もはなはだしい限りです。

ルオット島の墓参を終えて、翌日はリード司令官のご出席を戴いて、クェゼリン島における慰霊祭が粛々と執り行われました。

主人の遺影と共に焼香し、礼拝しましたが、込み上げるものを感じ、暫し顔を上げることが出来ませんでした。

目的を果たした翌日、島内のご案内を戴き、頭の中でいろいろと想像推し量りはしましたが、今は両手を合わせるのみでした。

島を上げての歓迎会、そうなんです。高林さんの発案で浴衣姿で出席して好評でした。

司令官のご出席、そして我等がファミリーであるとのご発言もあり、また日本通の方もおられ、日本の歌、現地の方の歌とこもごもで、大変楽しい時間を過ごすことが出来ました。

遺影の主人と共に義兄にお会いする事が出来、今は胸の閊えが下り、さわやかな気持ちになりました。

有り難うございました。

とつくにの 熱きもてなし
身にしみて
慰霊の旅に 思い深まる

合掌。

油井 芳枝
（長野）

思い出の一ページ　この度私は四回目のマーシャル方面遺族会現地慰霊に行って参りました。役員の方々またいろんな方面の役員の方々のご努力により、夢にも思わぬ歓迎会を開いて頂き、本当に心から感動を致し、帰国してもあの夜の事は、人生の思い出の一ページとなりました。

歓迎して下さった皆様お忙しい所司令官様、クェゼリンの地主様、酋長様、マーシャル政府代表様始め地元の皆様、本当にすばらしい出会いを有難うございました。

ほとんど言葉など通じないのに、笑いあり、涙ありで感無量の一時を過ごさせて頂きました。オーストラリアからかけつけて下さったドボルザークさんより一人ひとり自己紹介して下さいと始めますと、オーオーと声を出して真剣に聞き入っていました。

ハワイから見えたジミー松永さん、幼少の頃に覚えた歌を次から次と、一晩中でも良い位歌って、その場を盛り上げて下さり、すばらしい一夜でした。

クェゼリンの方々の暖かさは雰囲気で伝わりました。また今回は今までにない海水浴も出来、泳げる方はエメラルド・グリーンのすばらしい海中の世界も見えて感動の連続だったと思います。

最初から最後まで面倒を見て頂いたドボルザーク様、オーストラリアからわざわざここまで来て下さり、本当にご苦労様でした。また何年ぶりに「浴衣」姿になった気分は皆さん大変に良かったでしょうね。

すばらしい一夜をありがとうございました。

元気で皆様と再会出来る事を楽しみにしております。

慰霊祭風景。

Sumiko Suehiro honors her father who was killed on Kwajalein at the bereavement ceremony on Wednesday.

Japanese visitors honor relatives killed in World War II at bereavement ceremony

By J.J. Klein
Reporter

A makeshift altar, lovingly assembled with family photographs, two bottles of sake, a carton of cigarettes, oranges and more, stood at the base of the memorial at the Japanese Cemetery on Kwajalein a week ago. Today the memorial is bare, the gifts and offerings have been removed. All that is left are the spirits of the Japanese servicemen who died on Kwajalein during World War II.

Each year, since 1975, members of the Marshall Islands Bereaved Families Association come from Japanese cities and towns to Kwajalein and Ebi-Namor to pay tribute to and pray for their loved ones who lost their lives in the bombardment of Kwajalein in 1944.

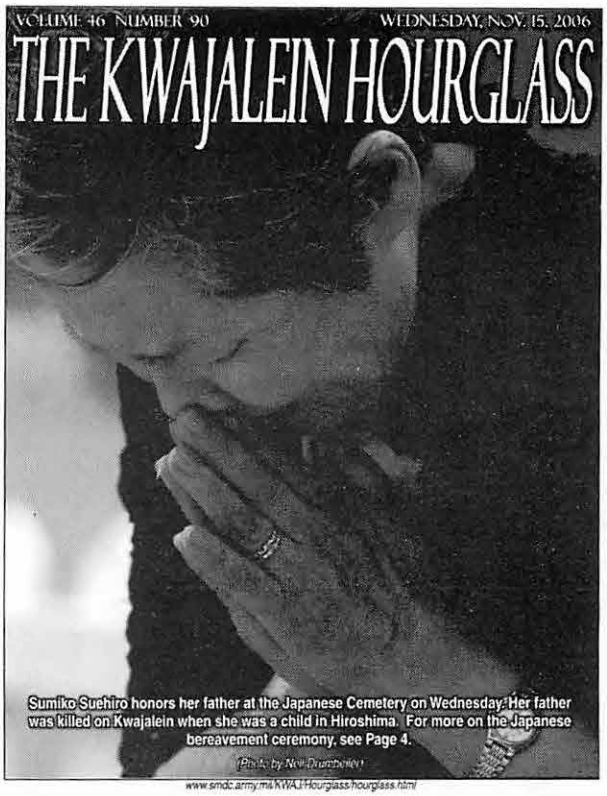
It is important for these families to "connect with the place, to commune with the spirits of the people who died here whose bones still rest in the soil or lie in the bottom of the lagoon," said Greg Dvorak, Australian National University graduate student, former "Kwaj Kid" and interpreter for the group. "For them it is an amazing experience to get that sense of closure, to heal and to have that recognized extraordinarily by the U.S. Army, by nature of the fact that this is a U.S. military base."

U.S. Army Kwajalein/Reagan Test Site Commander Col. Stevenson Reed greeted the association and honored the delegation by participating with the families in the ceremony.

"We share in this solemn day," said Reed. "We also lost many lives and even now, as allies, this special ceremony brings us together. They [the dead] are part of our family. I want to thank you for taking the time to come back and not forget those who lost their lives here."

Of the members who visited Kwajalein last week, some

"We share in this solemn day. We also lost many lives and even now, as allies, this special ceremony brings us together. They [the dead] are part of our family. I want to thank you for taking the time to come back and not forget those who lost their lives here."
— Col. Stevenson Reed, commander, U.S. Army Kwajalein Atoll



Sumiko Suehiro honors her father at the Japanese Cemetery on Wednesday. Her father was killed on Kwajalein when she was a child in Hiroshima. For more on the Japanese bereavement ceremony, see Page 4.
(Photo by Neil Dumbeldon)

www.smdc.army.mil/KWAJ/Hourglass/hourglass.html

Answering a call for help

Church of Jesus Christ of Latter-day Saints sends medical supplies to Ebeye Health Center

By J.J. Klein
Reporter

In February, Ebeye Hospital Administrator Tarjuna Milne wrote a letter requesting assistance from the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. On Oct. 23 the scanner arrived in a 40-foot shipping container brimming with medical supplies for the Leroy Kilang Memorial Health Center on Ebeye.

The donated supplies were formally handed over in a ceremony held in the hospital courtyard on Friday attended by Milne, Irene Paul, Republic of the Marshall Islands Kwajalein Atoll assistant secretary of health; Bill Davis, LDS Micronesia Humanitarian Service Center manager; and Dave Burrill, LDS Kwajalein District president.

The shipment, valued at more than $100,000, consisted

"I was working in the Kwajalein emergency room when I saw an old man with a badly fractured hip. He would never walk again. He knew it, we knew it. He and his wife begged for a wheelchair. We had no wheelchair to give him, and I knew it was his death sentence."
— Dr. Jill Horner, Kwajalein Hospital physician

of 44 wheelchairs, 1,968 hygiene kits, 1,152 newborn kits, crutches, syringes and needles, hospital gowns, scrubs, surgical masks, intravenous catheters and many other medical supplies needed at the hospital.

Medical supplies, hygiene and newborn kits will be distributed free to patients admitted to the hospital as part of the agreement between the LDS church and the hospital. Patients will not be charged. Davis said, because these are donated supplies good only to benefit the patient.

"The church has a very large humanitarian program to assist those in need," said Davis. "These programs help children and families of all nationalities and religions by relieving suffering, helping people help themselves, and providing opportunities for service."

Currently the majority of LDS humanitarian donations are distributed to areas devastated by the 2004 tsunami, Hurricane Katrina and Southeast Asia, "we are very fortunate that we could donate to this area," said Davis.

The Kwajalein LDS congregation assisted in the coordination and transfer of this shipment of donated goods from Salt Lake City.

"These shipments are always very timely," said Milne. "We received a shipment three years ago right at the end of our budget year, and it helped supplement our depleted supplies." To date the LDS church has donated three shipments in three years to the Ebeye hospital.

Dr. Jill Horner, a physician with the Kwajalein Hospital, can attest to the timeliness of this current donation.

"I was working in the Kwajalein emergency room when I saw an old man with a badly fractured hip. He would never walk again. He knew it, we knew it. He and his wife begged for a wheelchair," said Horner. "We had no wheelchair to give him, and I knew it was his death sentence.

"As is common on Ebeye, his house has no indoor plumbing, which means someone has to carry him to the ocean for bathing," continued Horner. "The next week the container from LDS arrived. He was the first on the list to receive a wheelchair."

Under the newly established protocol by the Ebeye hospital, patients with injuries will receive wheelchairs and crutches. This would include amputees, physical therapy patients and the elderly who are no longer mobile, said Milne.

"A lot of the wheelchairs are needed because we don't have any way to repair the chairs, we don't have the time or replacement parts," Milne said. "We'll replace the old wheelchairs with the new donated chairs and keep the old ones for parts."

The physical therapy department received a much needed supply of crutches, casting materials, splints, braces and compression stockings.

"It's very expensive to have these supplies," said Sheryll Ramon, physical therapist. "This donation saved us a lot of money."

JAPANESE, from Page 5

Ato Langkio, an elderly Marshallese man the same age as many of the members of the association. As a boy, Langkio attended a Japanese school on Kwajalein where he learned the language and a few Japanese songs.

During the dinner the, Japanese families entertained the guests with songs, enumerated in the group were Langkio and 43-year Kwajalein resident Junior Matsunaga singing in Japanese the songs that bubbled up from memories of a long time ago. The spirit of camaraderie was evident in the shared laughter that evening.

Remember the spirits of the dead at the Japanese Cemetery? But wait! do the visiting families believe that the spirits of their loved ones are present on Kwajalein, but they also believe their ancestors are protecting them and sending them messages, said Dvorak.

Hours before the delegation was set to fly home, the members checked their luggage at the airport and then walked over to the Marshallese Cultural Center. Facing northeast and following them their one building to the west were a flock of white birds.

After spending the morning looking at the exhibits at the Cultural Center, the families headed back to the airport, again accompanied with the flock of white birds, perhaps a sign that their loved ones are always with them.

The Kwajalein Hourglass — 5 — Wednesday, Nov. 15, 2006

Tomoko Sato pays her respects to her father who was killed on Enewetak Atoll.

came solo, some came with family members. Some have made this pilgrimage every year since 1975, and for some this was their first visit to the cemetery. For all who made the journey it was an emotional experience.

A frail Mikisaburo Iwase made this trip to Kwajalein for the first time and quite possibly his last. Iwase is dying of throat cancer and came to mourn his older brother, Fujimatsu Iwase, who died on Kwajalein. The 22-year-old soldier would have been in the second wave of soldiers transferred from the Japanese front in Manchuria and sent to reinforce the island with additional soldiers toward the end of 1943, said Dvorak.

"He came straight from Manchuria, that would have meant that he had no knowledge of what it would have been like in the Pacific," said Dvorak, who is interviewing these families for his PhD.

Only recently did the Iwase family find out Fujimatsu died on Kwajalein; before that they believed he died in Manchuria.

Barely able to speak because his voice box had been removed, Iwase told the interpreter he was happy that the memory of his brother was kept alive, commenting on the request by Leslie Mead, Kwajalein Range Services Environmental scientist/archaeologist and Dvorak for photographs. He was amazed that the Japanese had ventured to a place so far away from Japan.

Back to front, Mikisaburo Iwase, Shizuko Hirume and Shizuko Okura plant a tree donated by Col. Stevenson Reed in honor of the deceased family members.
(Photo by Neil Dumbeldon)

Iwase also marveled that a seemingly peaceful island was the site of this horrible, bloody battlefield in which one palm tree was left standing.

Iwase was able to get a sense of how his brother died after visiting the Cultural Resources facility and talking with Mead. This was the first time in the 31 years since the bereavement association has been allowed on Kwajalein that it was able to visit the lab, look at artifacts and learn about the Kwajalein bombardment from a Kwajalein authority.

Families of the bereavement association were treated to another first when they were invited to meet Marshallese citizens and Kwajalein residents with Japanese heritage at a dinner co-hosted by the bereavement association and the Marshallese Cultural Club at Emon Beach.

The Japanese families were introduced to special guest

See JAPANESE, Page 6

5

www.smdc.army.mil/KWAJ/Hourglasa/hourglass.html

クェゼリンの新聞記事

THE KWAJALEIN HOURGLASS より
By J.J.Klein (Repoter)
山口良二（訳）

以前にも本紙でご紹介したクェゼリンの新聞「アワーグラス」（写真右ページ）が届きました。本会現地慰霊の様子が詳しく掲載されておりますので、要点を拾ってここにご紹介致します。

遺族　Honoring family

日本からの訪問団は戦没者墓地において第二次世界大戦で戦死した将兵を慰霊した。

先週、日本人墓地の慰霊碑の前にしつらえられた臨時の祭壇には数々の写真、日本の酒瓶、タバコ、オレンジなど心を込めたたくさんの品々が並べられた。

今日、墓地は元通りになった。しかし供え物は片付けられたが、第二次大戦中にクェゼリンで戦死した日本軍将兵の魂は全てそこに残っている。

1975年以来、マーシャル諸島遺族会の会員はクェゼリン、ルオットなどの島々の戦場で1944年に戦死した戦没者の慰霊のため毎年日本の各地より来島して慰霊祭を行っている。

米国陸軍ケゼリン・リーガンミサイル実験サイト司令官スティブンソン・リード大佐は遺族と共に慰霊祭に参列し、戦没者を慰霊し次ぎのように語った。

「私たちはこの厳粛な日を共有しています。私たちは多くの尊い命を失いました。この特別な慰霊祭をともに挙行しています。戦没者は私たちの家族です。私は皆さんが戦没者を忘れず、こうしてこの地へ戻って来られたことに感謝します」。

帰国の前夜、遺族会はエモンビーチのカルチュラルクラブにマーシャル諸島の人々、クェゼリンの人々等を招待し、パーティを開いた。

遺族会は特別ゲストとしてマーシャルのアト・ラングキオ酋長を招いた。氏はその昔日本人学校で学び、日本語を今でも少しながら話せた。氏と共に皆で日本の懐かしい歌を歌い忘れがたい一夜を過ごした。

翌朝一行は空港近くの「マーシャル・カルチャーセンター」を訪問して展示品を見学した後、グアム経由にて帰国の途についた。

平成十九年「総会・直会」会場

先号で十九年度の総会・直会の会場を靖国会館の都合で「九段会館」に変更するとのお知らせを致しましたが、その後「靖国会館」での開催が可能になりましたので、二ページでご案内の通りです。重ねてお知らせ致します。

お詫びと訂正

先号七ページ「賛助金芳名」欄におきまして、熊本県「片山玲子」さんを「石山」、同県「右山定」さんを「石山」と誤植を致しました。ここにお詫びをして訂正致します。

上：ルオット島慰霊祭（11月7日）。下：現地マーシャルの人々との交流会（11月8日）。